



## 札幌地区宣教司牧評議会の見直しについて 「宣司評」から「カトリック札幌地区」へ



札幌地区長 勝谷 太治

札幌地区宣教司牧評議会は、教区ビジョン「みんなで支え合い、みんなが伝え合う教区」を司祭、修道者、信徒が一体となって実現することを目的に1996年に設立され、この間、福音宣教や教会活動のさまざまな課題や優先事項に対して地区としての取り組みを推進してきました。

宣司評は、札幌地区のさまざまな事業や行事の実施と、それを支える財政事務、将来へ向けてのビジョンづくり、信徒の養成などを行っています。具体的には、使徒職大会、各種の研修・交流会、平和旬間、海外エクスポージャーなどの青少年向け活動、要理担当者・葬儀奉仕者の養成などで、多くの人々が参加しており、特定の人たちが

やっていることではありません。しかしながら、今もって「宣司評は何をやっているところ？」という声が多く聞かれ、信徒の皆さんにはなじみが薄いところという印象をぬぐえません。宣司評も発足から十数年が経過し、改編された地区のブロック体制が軌道に乗り始めた今、組織や運営方法の見直しを考える時期となりました。

**就任にあたり、私は今後の宣司評の活動にとって留意すべき以下のポイントを示しました。**

- (1) 司祭・修道者・信徒が同じテーブルについて地区の宣教司牧について考える
- (2) 会議の負担を軽くする
- (3) 縦割りの弊害をなくす
- (4) 小教区の意見を吸い上げる

このような趣旨をふまえ、新しいブロック制を生かした地区活動を推進していくためには、現在の宣司評の組織や運営を大胆に見直す必要があると考えました。従来のように年4、5回の宣司評では、現実の小教区を支える適切な方策がなかなか話し合えず、協議よりも報告の場になっていました。またこれまで8つの委員会、部会が独自に有益な研修、講演会、催しを企画してきましたが、各小教区選出の委員は年々集まることが困難になり、幾人かの委員が企画運営の過大な苦勞を負うことにもなっていました。しかも、幾つかの委員会等で担当司祭を欠いたままの状態が続いているのが現状です。

このような認識のもと、今回の改革の趣旨を表現するなら、小さな中央組織、ブロックに根ざした活動や支え合いへの軸足の転換、委員会や部会を整理し札幌地区として必要な活動を見極めて、力を集約することです。

さらに、「宣司評」という呼び方が上で述べたように一部の役員や評議員が何かを決めている特殊なところというイメージを持たれていた一因ともなっていましたので、今後はなるべく使わず、「札幌地区」を用いるようにします。

今回の見直しは、単なる「宣司評」という組織の改革ではなく、札幌地区教会の未来の司牧と宣教に繋げた信徒の養成や小教区の改編を見据えたものにしたという意図もあります。今後の活動を見た上での更なる改善が必要となると思われませんが、臨機応変に対応して行きたいと考えています。札幌地区が真に宣教する共同体としての新たなスタートを切るために、皆様のご理解とご協力をお願いします。

## 2010年度 第1回札幌地区宣教司牧評議会の開催

2010. 5. 23 於：山鼻教会

今年度第1回の宣教司牧評議会が開催されました。今回の評議会の主要な議題は、冒頭で勝谷地区長が述べているように、宣司評の組織と運営方法を大きく変更し、新しい地区の体制で宣教司牧を推進していくことです。そのねらいは、小さく効率的な中央組織、地域に根ざした活動（ブロックの活用）、地区として必要な活動に力を集約できる弾力的な運営です。

主な変更点は、これまで年4回開かれてきた評議会が全ての小教区からの意見を吸い上げて運営を行ってききましたが、今後は、評議会は年1回の総会的なものとして位置づけ、東西中央の3ブロックで小教区の意向を調整します。また、諸課題に対応してきた地区レベルの委員会・部会は一旦廃止し、諸活動については地区レベルで行うものと、ブロックで行うものに振り分けます。また、「宣教司牧評議会」という名称は会議を指すものですが、組織名のようにもとらえられ、わかりにくさを助長した面もあったので、これからは「札幌地区」という呼び方を一般的なものとしていくなどです。

会議では、この見直し案についての審議に多くの時間を割きました。提案に対して、疑問の意見も多数出ましたが、簡素で効率的な組織運営、社会に向けての福音宣教の重要性、地区の力を結集した取り組みなど評価する意見も多く、規約の若干の訂正と今後も必要な見直しを行うことで了承されました。この決定により、現在のメンバーでの評議会は一旦廃止されることになりました。

他に、前年度の活動総括、事業報告、決算報告および今年度の活動方針、事業計画、予算案が承認されました。詳細は、小教区に議案書が配られていますので参照してください。



## 2010年度 札幌地区宣教司牧評議会活動方針

### 1 基本方針

- (1) 「宣司評」から脱皮し、「札幌地区」としての一体性を培う。
- (2) 各ブロック（東・中央・西）活動の充実と、各ブロックモデラトルを中心メンバーとする企画推進会議との連携を強化し、それぞれの役割を担う。
- (3) 諸委員会・部会から、実行委員会・作業部会へのスムーズな移行を図る。これまでの活動を地区レベルで行うものと、ブロックに委ねるものに振り分け、停滞なく実施できるよう努力する。
- (4) 社会への宣教と福音化を目指した活動（講演会、研修会、聖書を読む会など）の試み。

### 2 課題と活動 — 基本方針の展開

- (1) 地区機関誌「ともに」、評議員、モデラトルと企画推進委員からの発信が大切になる。また地区交流会等々を通して、「地区」意識が養われるよう努める。
- (2) ブロックは小教区からの声を、企画推進ではブロックからの日常の声を十分に聞き、それぞれの活動に反映させ、行事の準備のみに忙殺されないように努める。また、それぞれの議事録等を共有するよう努める。
- (3) 昨年度から引き継ぐ諸活動について、実行委員会・作業部会を早急に組織することが重要である。当面は元の委員の協力を乞う一方、新たな奉仕者を募る必要がある。そのために各小教区とのパイプであ

る評議員の協力をお願いする。

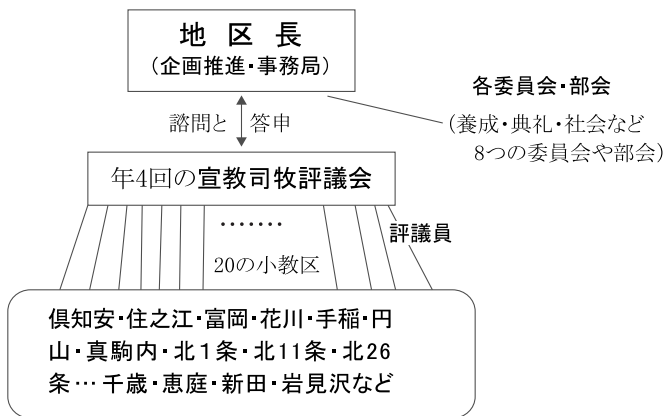
- 具体的には、夏の侍者研修会／第2期に入る要理担当者養成講座／典礼研修会／雨宮師による聖書講座と晴佐久師による講演の市民向け企画／地区交流会／家庭部会が実施してきた家庭環境をテーマにした学習会等
- (4) 教区民の6割強を占める信者を擁する札幌地区として、教区レベルの企画への積極的な参加と協力が要請されている。
  - 札幌教区主催行事である「正義と平和全国集会」への参加と協力。今年の「札幌地区使徒職大会」はこの全国集会3日目、9月20日(月)のシンポジウムとミサへの参加をもってこれに代える。
  - 教区主催「国際デー」(実行委の主体はうえるかむはうす)、9月26日
  - 平和旬間行事(実行委の主体は社会委員会)7/24に平和講演会 8/15平和祈願ミサ、平和行進など
  - カト高夏期キャンプ・全国青年の集い-ネットワークミーティング・春の練成会・エクスポージャー(主体は青少年委員会)
  - 10月の札幌市内合同墓参(司教館に協力し、札幌市内教会持ち回りで)
  - 家庭支援センター／うえるかむはうす／働く人の家などとの連携(それぞれの企画行事への参加や人的経済的支援)
- (5) 多国籍の人々と共に生きる教会(諸外国から在住の方々)となるための取組みを継続して行っていく。
  - 小教区に受け入れる努力。宣司評や企画推進に英語ミサグループのメンバーの参画を考える。

## 2010年度 札幌地区行事予定

No	行事名	月	日	曜	会場	講師等	主管・備考
1	平和旬間 平和講演	7	24	土	北1条教会	菊地功司教	平和旬間実行委員会
②	カト高 夏期キャンプ	8	3 5	火 木	洞爺湖滝の上キャンプ場	森田神父	カトリック高校生会 協力：青少年委員会
3	中高生侍者研修会	8	12 13	木 金	支笏湖Y.H.	エムリク神父	侍者WG
4	平和祈願ミサ 平和行進	8	15	日	北1条教会 大通公園	司式：新海神父	平和旬間実行委員会
⑤	第36回 カトリック正義と 平和全国集会・札幌大会	9	18 19 20	土 日 月	聖公会札幌教会 北11条、天使大 北11条	菊地・松浦・幸田各司教	札幌教区主催 実行委員会
⑥	国際ディー	9	26	日	北1条	マイレット神父	教区行事 うえるかむはうす
7	要理担当養成講座 2期	10				札幌地区司祭団	要理担当WG
8	全国青年の集い ネットワークミーティング	10	9 10	土 日	支笏湖YH	森田神父	青少年委員会
⑨	札幌市内合同墓参	10	17	日	白石墓地他	当番教会	司教館主催
10	地区交流会 女性	10	21	木	エルプラザ (1日のみ)	勝谷地区長	女性WG
11	聖書講演会 —市民に みことばを	10	30	土	公共施設等	雨宮慧神父	聖書WG
12	病者への聖体奉仕	11	14	日	北26条	エムリク・上杉神父	典礼WG
13	葬儀の奉仕者研修会	11	20	土	円山教会	鈴木隆氏	葬儀WG
14	地区交流会 男性	1				勝谷地区長	男性WG
15	「非暴力について」	1	15	土	ベネディクトH		社会委員会
16	福音をつげる(仮題)	2	13	日	北11条教会ほか	晴佐久昌英神父	宣教WG
17	「自殺者」に寄り添う (仮題)パートⅡ	2				森司教	家庭WG
18	カト高 春の練成会	3				森田神父	カトリック高校生の会 協力：青少年委員会
⑰	高校生・青年エクスポージャー	3					教区青少年委員会

※○数字は教区行事 WG=作業部会の略  
詳細はそれぞれのご案内を参照のこと

## ◎ これまでの札幌地区宣司評の概念図



特徴：20小教区みんなで参加し、みんなで行おうとして、各委員会などにも各小教区から参加が求められた。宣司評と言われる全体会議も年4回では十分な話し合いの時間が取れず、消化不良。地区と小教区との連携が取れない。

また、各委員会や部会のメンバーや担当司祭にも欠員が生じ、一部の人にしわ寄せが来ていた。最近では日程が重なったり、せっかく良い企画でも参加者が少数だったり、また合併での企画も増えて来た。

⇒問題に対応して委員会を増やすのは限界！  
 実情に応じて、今、必要な事に絞って力を注ぐ！

## ◎ 新しい地区組織への改編の経緯と事情

### ここ2年ほどで、新しい局面が見えてきた

四年前までの4ブロック制の時は、地理的な関係から2つは機能していなかったが、3ブロックに移行してから動き出した。⇒各教会の内実を分かち合い、支え合える場となりうる！合同堅信式準備、子供の夏期学校などもブロックでは実績がある。何より、お隣の教会同士という親近感が支え合う共同体の雰囲気を生む。

### それで、「ブロックができることは、ブロックにゆだねよう」

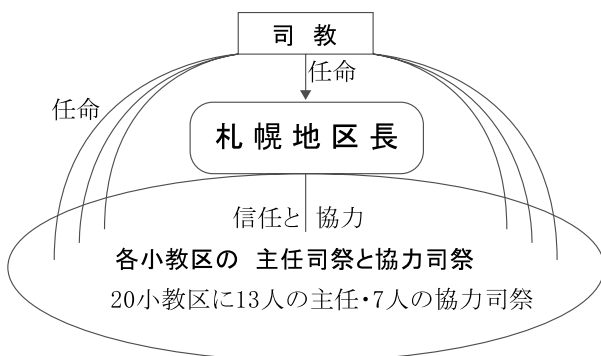
高齢者部会・子供の信仰養成などは、ブロック間の協力のもとに行う。もちろん地区としての財政的支えは手当てする。小教区の人的、財政的支え合いも融通し合えるブロック共同体を目指していく。これらは将来、一小教区一司祭がさらに困難となり、ブロック単位での司牧宣教へと移行する準備とも位置づけられるのでは。

### そして「ブロックの手に余ること、地区レベルの事は地区としてやる」

一般市民に向けた宣教のための企画（教会以外の公共の場で）、大きな研修会、また教区主催行事への協力（今年の正義と平和全国集会）など。各ブロックから「地区で取り組んで下さい」、と上がってきたことに柔軟に取り組むために、地区長の言わば執行機関である「企画推進と事務局」のもとに、作業部会や実行委員会を置く—その分野に長じた人にメンバーになってもらう。これらのために、企画推進の主要メンバーには、各ブロックのモデラートルが当たる。

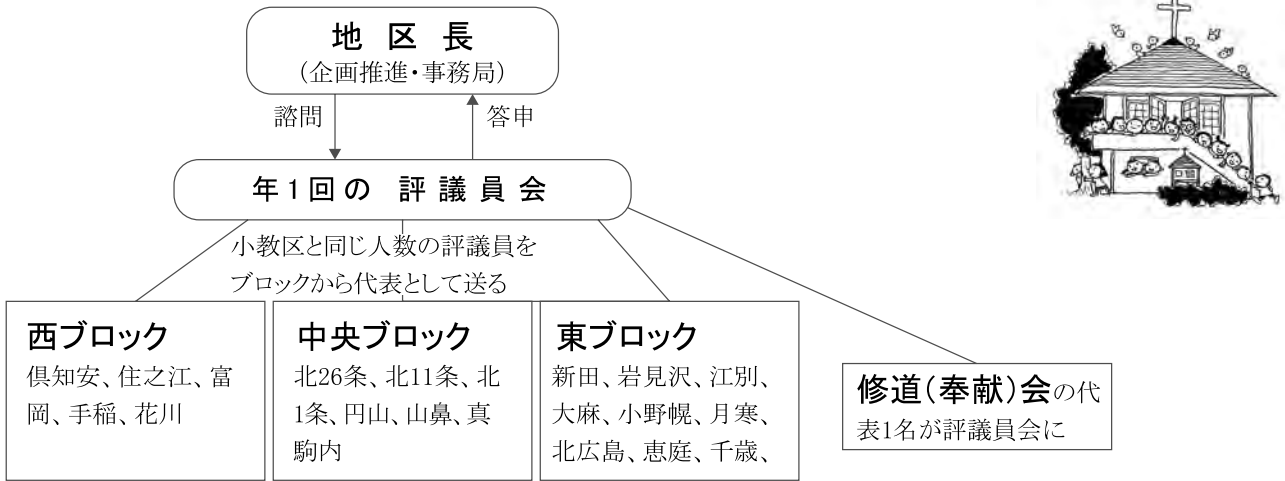
## ◎ 新しい札幌地区組織の概念図—正式な組織図ではありません

### 1. 司教・地区長・司祭の関係概念図



説明：札幌地区長は人事と財政についての権限はなく、今後の検討課題です。しかし地区長として司教の諮問に答えるために、地区の意見をまとめます。各司祭は地区長を信任し地区の宣教司牧活動について協力します。

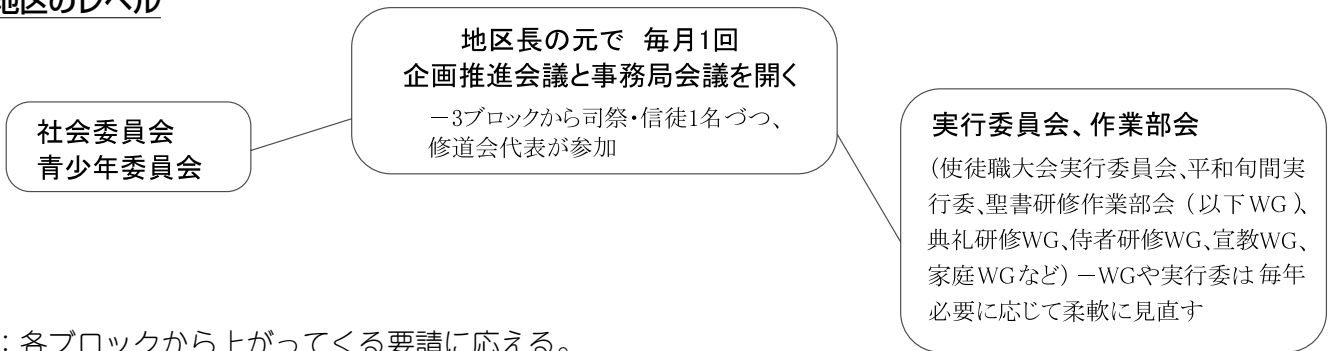
2. 「宣司評」改め「地区」の意思決定の概念図



説明：評議員会は小教区での「総会」と同様に当年の活動方針・決予算などを審議。この「宣司評」を地区全体の呼び名にしていたので、分かりづらかった。今後は、「宣司評」ではなく、「地区行事、地区活動」というように、呼び名を統一していきたい。

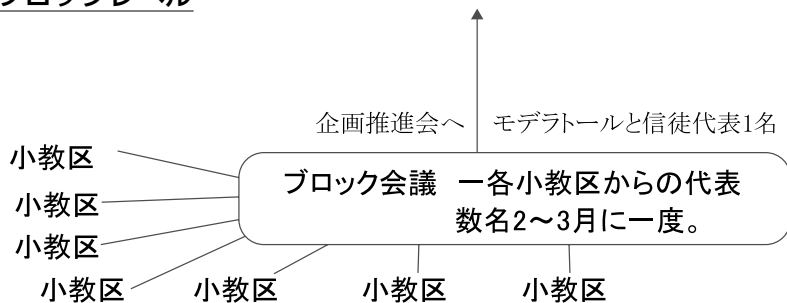
3. 日常の「地区」および「ブロック」活動の運営や実行に関する概念図

地区のレベル



説明：各ブロックから上がってくる要請に応える。  
各実行委や作業部会が動き易いように実施の基本線を決める。各部門の連携と地区の一体性を図る。

各ブロックレベル



説明：ブロック会議は小教区と地区を結ぶ「かなめ」。  
他のブロックの動きについては、月1回の企画会議において情報交換する。他に地区機関誌「ともに」を活用。

(文責：企画推進会議議長 上杉)

# マハトマ・ガンディーの非暴力について



講師 中島岳志さん

北海道大学公共政策大学院

法学部准教授

2010年1月15日（金） 18:00~20:00

聖ベネディクト・ハウス

参加者 30名

主催 札幌地区カトリック正義と平和委員会

札幌地区宣教司牧議会・社会委員会

非暴力による抵抗運動に生きたマルチン・ルーサー・キングJr. 牧師の誕生日（1929.1.15）からマハトマ・ガンディーの暗殺日（1948.1.30）までの約2週間を〔非暴力・平和旬間〕と位置づけ、非暴力による平和をめざすための学びと取り組みをはじめたいと企画されました。今回はその第1回目です。

## 講演要旨

ガンディーは1869年西海岸に近いポールバンドルで生まれました。父は藩王国の政治家で、13歳で結婚します。英国留学をして弁護士資格を取り帰国（22歳）。1893年（24歳）訴訟事件の依頼を受けて南アフリカに赴きますが、そこで屈辱的な人種差別を受けました。以後インド人の人権をとりもどす運動を開始しますが、自己反省もします。フェニックス農園などを開き（35歳）、自給的な共同生活を始めました。そこではカーストによる分業に関係なく皆平等でした。よびよせた妻にもトイレ掃除などを強制しています。20代までの欲望にまみれた生活からの反省でしょうか。「性欲の抑制」と「菜食主義」を実行することになります。

1915年（46歳）帰国し、アーメダバード郊外に修養道場を開きます。そして国民会議派のリーダーとして独立運動に身を投じることになるのです。

ガンディーを語るときの「キーワード」は「非暴力」と「不服従」です。彼は単に「暴力を使わない

ことが良い」と言っているわけではなく「暴力を捨てる勇気を持つことが重要だ」と言っています。暴行場面に出くわしたら見てみぬふりをするのではなく、何とかしてそのような不正を止めるための勇気を持つことを重視しています。「非暴力を臆病の楯にしてはいけない」、「臆病になるな、正義を実行せよ」。この精神は彼の座右の古典「バガヴァッド・ギーター」に源があります。「無私なる行為は、アヒンサー（不殺生）にまさる」。

ガンディーの不服従運動は「サットィヤーグラハ（真理の主張）運動」と言われます。始めは、南ア時代の1908年（37歳）のときです。「アジア人強制登録法」に従わず自ら逮捕され、多くの人がガンディーにならい刑務所は満杯、しかし法案は撤回されず、身分証明書を焼き捨てようと呼びかけ、再び投獄されます。ガンディーは以後、幾度も投獄されることになり、生涯のうち2千日以上を刑務所ですごしています。皆を逮捕すれば収容しきれなくなり、困るのはあなたたちだろう、という戦法です。

ガンディーの不服従運動には、〈歩く、食べない、糸車を回す〉など具体的な行動をともなっていました。年代は前後しますが、1929年国民会議派（ネルー、C・ボース）の大会で「インドの完全独立を決議」し盛り上がった翌年（61歳）、「塩の行進」を行います。イギリス人が塩を独占し、高いお金で買わされていたのです。「海岸まで歩いて塩を作りに行く」と言いだし数十万人の民衆が参加しました。ガンディーは投獄されますが、跡を継ぐ人が次々に現れ製塩運動は続きました。

1921年（52歳）、イギリス製の綿製品のボイコットを始め、「皆なで糸車を回して手織りの布を作ろう」と呼びかけます。原料綿のみを安く買い、機械織りの製品をインドに売りつけていたからでした。

ガンディーは独立の過程で何度も「断食」をしました。不当な法令が出されると撤回されるまで食を断ち、民衆が諷めをきかず争いを起こすと食を断ちました。1918年（49歳）アーメダバードの工場ストライキを指導したとき、労働者に断食を呼びかけ、交渉に力を発揮しました。1919年（50歳）「ローラット法」（インド人弾圧法）に反対し、ハルタル（一斉休業）を行い、断食を呼びかけ、イギリス政府をあわてさせました。

1932年（63歳）アウトカースト（不可触民）分離選挙法案に反対し、断食を行い法案は撤回されました。1947年（78歳）の独立前後にヒンドゥーとムスリムの紛争が激化したとき、「人々が戦いをやめるまで断食する。死んでもかまわない」と言って、一切の食べ物を口にすることをやめました。かなり危険でしたが、紛争をやめさせることに成功しました。

ガンディーは、インドを「暴力を超越した正義にコミットする国家」にしたいと考えていました。軍隊を基本的に否定しましたが、警察組織や刑罰は否

定していません。

行動は、歩く・食べない・回すと言うように、自分の姿をみせることで、わかりやすく、宗教に関係なく参加できるものでした。ヒンドゥー教だけではなく、すべての宗教につながる真理を取りこもうとしていました。

職制によるカーストには反対しましたが、四姓は否定しなかったので、アウトカーストの人から誤解されたりもしました。1915年以来独立まで32年もかかりましたが、ガンディーは「よいものは、カタツムリのように進む」と言っています。

1948年（78歳）ヒンドゥー・ナショナリストの青年に暗殺されます。「ガンディーはムスリムにあますぎる！」

いまだに果てのないテロの報復合戦を見ると、「ガンディー」はたった一度の夢物語だったのだろうかと思ってしまう。

講演のあと、参加者からの質問に応じて、種々興味あるお話をきくことが出来ましたが、省かせていただきます。

なお、講演要旨をまとめるにあたり、著書「ガンディーからの〈問〉い」を参照させていただきました。

（社会委員会 松井洋治）



## 外国につながる子どもたちの育成 ～遠隔地へ向かう外国人信徒宣教師の活動をきっかけにして～

2010年2月26日(金) 10:00～2月27日(土) 15:00まで

この管区セミナーは、教会に集う様々な人々が、ともに生きる、「共生」できるように、特に外国人をどう受け入れていくかを話し合うことを目的に、開かれました。



北海道の外国人の子供たちの状況を見ても、相当深刻な問題が潜んでいることが、浮かび上がってきています。母子家庭、

父子家庭が多く、親が普段そばにいないので、基本的な信仰がなく、祈ることも、十字を切ることも知らない子供が相当数います。その親たちと子供たちはほとんどが、日本の教会へ行ったことがない、または初めて門をたたいてみても、日本の教会が異質なものと感じ、何となく足が遠のいていってしまいます。したがって秘跡にあづかれない子供たちが激増しています。

私たち日本人信者も、外国人を受け入れることにとまどいがあります。受け入れるノウハウがない、馴れていない、せっかくみえられた外国人の方が何を望んでいるのか、知るのが大変へたです。

日本の教会は、外国人とひとつになるために、橋渡しをする人、そのサポートをする人、そして受け入れノウハウ、すなわち知恵・アイデアを必要としています。市川教会などは、ミサ後外国人グループと食事会を開催するなど、工夫しています。お互いにより良いコミュニケーションをとるために、必ずしも英語は必須ではありません。ポディランゲージなどで、十分通じます。要は熱意と、創意工夫でしょう。

こういうことを踏まえたうえで、2月26日～27日、札幌を会場に、東京管区ほか8教区から計60名が参加して、開催されました。

初日は、各地の教会が抱える問題点を、パネルで紹介しました。その後のグループ討論では、国際色豊かに、さまざまな国の専門家、特に異文化理解がご専門の先生などから、貴重なお話いただきました。

たとえば、フィリピン女性が結婚で日本に来て、子供ももうけたが、夫とすぐ離婚、その後引きこもって孤立化し、信仰心をはじめとする子育てが、全く立ち行かなくなっている家庭が多いのです。

そこへ行ったら、フィリピン人の誰かが必ずいる、といった母国人との横とのつながりを作れる環境設定や、行政サービスを気軽に受けれるネットワークやNGOと

のかかわりなど、まず草の根の交流からはじめ、それが在日フィリピン人に口コミで広まるようにします。そのプロセス抜きに教会活動をいきなりすすめても、うまくいかないなど、活発な議論が交わされました。

夜は、近くのお蕎麦屋兼居酒屋で、懇親会が行われました。菊地司教や、谷司教をはじめ、マイレット神父、マンフレット神父、マルティンオマン神父、シスター細渕、シスター田中、シスター佐久間、フィリピンからの女性宣教師エディッタさん、同じくミランダさんをはじめ、うえるかむはうすスタッフの皆様、各教会の信者さんら32名の参加でした。多少アルコールが入ったほうが、盛り上がるがありますが、今回はまさにそのケースでした。



翌日は、北1条教会に場所を移して行われ、菊地司教の司式によるミサとお説教では、すべての人種が信仰に結ばれ、あら

ゆる障壁を取り去りひとつになる目標を示されました。谷司教の講話「外国人との共生」では、特に入管法改悪について寝耳に水でしたので、真駒内教会を代表して質問もいたしました。昼食後は、全大会として、ふたグループにわかれ、まとめの意見交換を行いました。

2日間で、メモがA4用紙で、15枚ほど取れましたが、その十分の一も紹介しきれず、残念です。必要とあれば、いつでもそのメモはお見せします。今後もひとりでも多くの方が参加されることを期待いたします。

最後に、この東京管区セミナーの様子は、カトリック札幌教区報2010年4月25日号や、「うえるかむはうす」だより2010年5月22日号(スタッフの佐藤靖氏著)で、報告されています。詳しくはそちらをご覧ください。私は少し焦点を絞って書いてみました。その点どうぞご了承ください。(真駒内教会 棚川伊知郎)





# 奉 献 生 活 聖マリア在俗会

## 世にあって奉獻を生きる

### ～20世紀に生まれた在俗会という新しい在り方～

カトリック教会には、洗礼によって始まったキリスト者としての生き方を神の招きに応じて完成に向かわせる“奉獻生活”があり、奉獻生活の会には“修道会”と“在俗会”があります。在俗会員は、信徒の身分のまま奉獻された者です。

現在世界には150余りの在俗会があり、4年毎に世界会議と大陸で区分したアジア会議等が開催され、それぞれが置かれた社会の現状や人々の叫びに傾聴しつつ、神の国の実現への歩みを互いに強め合っています。

#### 【聖マリア在俗会の創立と歩み】

聖マリア在俗会（旧聖母カテキスタ会）は、1954年にドイツ人の神言会司祭ゲオルグ・ゲマインダ師によって日本で創立された女子信徒の会です。ゲマインダ師は、1947年教皇ピオ12世が発表した在俗会に関する教令「プロヴィダマーテル・エクレジア」を時の印と受け止め、本会の創立に至ったのです。



ゲオルグ・ゲマインダ師

1980年4月、聖座法による在俗会として正式に認可されました。

2006年12月25日、会の名称を「聖マリア在俗会」に変更し、現代に生きる会員と会に与えられた召命と使命をより忠実に生きようと、新たな歩みを始めたところです。

現在、日本国内に171名、韓国やタイ・ブラジル等の海外に18名の会員がいます。

#### 【聖マリア在俗会会員の召命と使命】

会員は、社会の只中であって全生涯を神に捧げ、自分の仕事に従事しながら、この世にキリストの価値観が浸透することを目指し、地の塩・パン種として働きます。また、深い母性愛をもって御子を育み、全人類の母としてご自身を惜しみなく与え尽くされた聖マリアを模範としています。



#### 【北海道の会員】

1963年に初めての会員が派遣されて以降、これまでに教会・カトリック文化センター・学校・司教館・幼稚園・病院等に途絶えることなく会員が派遣され、現在道内には7名の会員がおります。

#### — \*\*もっと詳しく知りたい方へ\*\* —

##### ①ホームページ

<http://www.maria-secular.jp/hou.html>

本部 名古屋市昭和区南山町6-1

TEL 052-831-6869

##### ②札幌ハイム

札幌市白石区栄通2丁目6-18

TEL・FAX 011-855-4777

##### ③召命の集いご案内

日 時：2010年7月25日（日）9:30～16:00

場 所：札幌ハイム

対 象：40歳までの女性信徒

参加費：1,000円

※ 詳細については札幌ハイム（鈴木）まで



## 月寒教会 司祭年のための24時間聖体賛美式 (ベネデクション)

森田神父様より司祭年のための24時間聖体賛美式を行うご提案がなされ、6月10日(木)18時～11日(金)18時30分まで行なわれました。

司祭が顕示器に御聖体を安置し祭壇の前に行き表敬し『恵み豊かな父よ、御子キリストはその死を記念するとうとい秘跡を教会に残して下さいました。主の体を受け、救いの力にあずかる私たちが主の死を告げ知らせることができすように。私たちの主キリストによってアーメン』と祈願を唱えられました。

その後、信徒は御聖体を礼拝し聖歌(カ)“目にこそ”を歌いました。

『目にこそ かくれ見えねど 神ここにこもりいます。我主を 拝みまつらん 我たま清め給え、主こそともにまします』

聖体賛美歌を歌っている時、神が私達に与えて下さった恵みの大きさ、いつくしみの深さ、

罪人である自分への招きにどのようにお返しすれば良いのでしょうかと問うばかりでした。

司祭が顕示器を持ち一人一人に祝福をして下さるこの喜びは幸福感で心が満ち溢れ鳥肌が立ちました。その後は個々に24時間、聖体礼拝・黙想へと入りました。翌日はイエスのみ心の祭日にも当り

『まことに聖なるイエスのみ心よ あなたに切に祈ります。私たちがこの世ではみ心の使徒として働き神のみ栄えとなりますように。弱い私たちに恵みを注いで強めて下さいますようにアーメン』と何人かの方々と一緒に唱えられた時、主が心にとどまって下さっていると思いました。この感動のまま18時30分にあずかり、しっかりとイエス様を頂き、主の平和の支配がこの教会に及びますよう祈り、賛美と感謝のうちにベネデクションが終りを向えました。

月寒教会 典礼部 平鍋 千鶴子

なんと美しいのでしょうか。

聖変化のあと、神は天国と同じように、ここにいらっしゃいます。

…人間がこの奥義をよく知ったなら、愛で死ぬでしょう。

神は私たちの弱さに釣りあうように取り計らってくださいます。

ヨハネ・マリア・ヴィアンネ



## 編集後記

宣司評が生まれ変わります。今号は、新しくなる宣司評について理解していただくように紙幅を割きました。宣司評を組織として見ると、いろいろな側面を持っているので複雑に見えますが、その目的は福音宣教です。宣司評は、教会がキリストの体として、社会に福音を伝えていくための地区レベルの共同体です。ひとり一人が集まってひとつの体です。今年は市民向けの活動も計画されています。神様の恵みの中でともに歩んでいきましょう。

(K. N)